



浮城の姫騎士
THE PRINCESS KNIGHT JANNE
ジャンヌ II

小説 筑摩十幸 挿絵 亀井
原作 桜沢 大

第六章

猥欲に染められた媚肉

第七章

堕ちゆく心

第八章

花嫁猥婚儀式

最終章

愛奴隷ジャンヌ

登場人物紹介

Characters



ジャンヌ・グルノーブル

伝説の天使の血をひくと言われる、リブファール国の王女。しかし現在は、ギドーとジェリクから調教を受ける身。



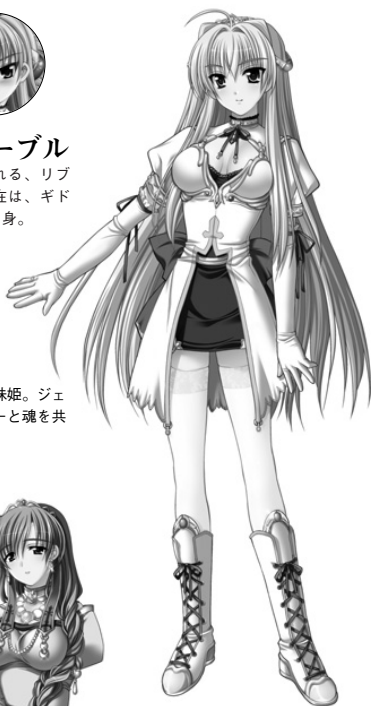
ユーワ

ジャンヌの腹違いの妹姫。ジェリクの魔術で、ギドーと魂を共有させられている。



セリーヌ

ユーワの実母でジャンヌの継母にあたる女王。亡き王にかわり国を治める貞淑な女性。



ジェリク

リブファールの乗っ取りを企む、ダークエルフの魔術師。

ギドー

粗暴なオーガ族のリーダー。並はずれた精力と怪力の持ち主。

キース

リブファール国の頼れる騎士長。

ゴルドン

キースの部下である騎士の一人。

「うへへ、これが浮浪人のチンポの味だ。よく味わえよ、お姫様」

本物の王女に奉仕させている気分、男たちの昂奮もサディスティックに上昇していく。
「うう……」

口中に溜まった唾液を吐き出すことは許されない。思いきって飲み下せば、胃が腐り落ちそうな汚辱感が胸いっぱいに広がった。もしジャンヌが何事もなく幸せに過ごしていたなら、一生味わうことなどなかった味だろう。

（こ、こんな汚いモノを……飲まされて……）

しかしそれほどの苦しみを味わわれながら、身体がカッカと燃えてくる。舌は休まずペニスに絡みつき、カリの裏側や鈴口を丁寧に清めながら這い回る。

「手が空いてるな、使わせてもらうぜ」

順番待ちの男たちも待ちきれなくなり、ジャンヌの身体の様々な箇所、勃起を擦りつけ始めた。

「ふふふ、綺麗なおててを汚してやる」

手錠を外された王女の掌に唾を吐きつけたあと、不潔な勃起を握らせる。

（ああ……手が……けがされて……）

無敵の剣撃を繰り出していた手指も、劣情の慰み者となった。悔しさに指が引きつって震え出す。

「俺は髪だ。このブロンドを垢まみれにしてやる」



腰まで届く金髪をたぐられて、ペニスに絡みつけられた。そして恥垢を磨くようにゴシゴシとしごかれていく。

(そんな……髪まで……)

亡き母の面影を残すブロードまで汚されてしまい、目隠しの下に涙が滲んだ。

「ククク、まるで雑巾だな。お陰でチンポが綺麗になるぜ」

「はあ……っ！ ああん……んんむっ!!」

ボロボロに汚されていく王女を揶揄しながら浮浪人たちがゲラゲラと嗤った。そこまで蔑まれ、雑巾扱いされながらも、怒りの感情がまったく湧いてこない。

(……こんなに汚されているのに……どうしてこんなに……気持ちいいの……?)

わけがわからなくなり、ジャンヌは夢中で膝立ちの腰を切なげに振り始めた。口淫奉仕も積極的になり、美貌が男の腹に密着するほど肉棒を深くくわえ込む。両手に握られたペニスをしごく手つきもリズムカルだ。頭の中も子宮の中も、煮えたぎるように熱い。

(ああ……欲しい……お腹の中……かき回されたい)

その願望を感じ取ったのか。

「そろそろ、はめてやるぞ」

フェラチオをさせていた男が、唇から勃起を後退させた。秘奥からも粘り糸を引く張り型が二本ともズルリと引き抜かれる。

「ハヒィッ！」

蜜壺もアヌスも開いたまま、濡れそぼった緋色の粘膜を男たちの前に晒す。抜かれた淫具も濃厚な牝蜜に濡れ、甘い芳香を放っていた。

「なんかいい匂いがすると思ったら、こいつのマ○コ汁の匂いだったのか。こりゃあ、期待できるな」

男も膝立ちになって牝腰を抱き寄せ、正面からクレヴァスを貫いてきた。すでにぬかるみと化している肉孔は抵抗の素振りすら見せず、不潔な男根を嬉々として呑み込んでいく。「ああああああああああああつ!!」

歡喜の悲鳴を迸らせ、金髪の姫の裸身が弓なりに仰け反った。どす黒い浮浪人のペニスが、ズブズブと淫蜜を溢れさせながら高貴な王女の媚肉にはまり込んでいくと、待ちわびていたかのように粘膜が絡みつく。

（ああ……浮浪人の……き、汚いペニスが……入ってきますわ……）

肉感ではオーガのモノに遠く及ばないが、溜まりまくった精気と最下層の人間相手に身体を開いているという転落感が、それを補ってあまりあるマゾの悦びを与えてくれる。

そしてついに浮浪人の男根が完全に根元まで埋まりきる。その瞬間――、

「あ、あ……ああああおおおおおおおつ!!」

王女はもう一度背筋をしならせ、牝獣のように咆哮していた。男根挿入により、マゾ奴隷の本能が本格的に目覚めてしまう。

（だ、だめえ……）

そこを巨棒に拡張され、無数の肉瘤を食い込まされて、快楽神経に火花が散る。極太で抜き差しされるたび、レモンを搾るように果汁が溢れ出た。

(どうして……こ、こんなに……)

これから妊娠させられるというのに、身体が燃えて仕方がなかった。瞼をきつく閉じ、眉をたわめて快感にこらえる姿は、男心を溶かす妖しさだ。

「どうだ？ これまで以上に感じるだろう。なにしろお前は、俺のすべての力を注いで育てた究極のマゾ奴隷だったのだからな」

ジェリクに強制受胎紋様を撫で回され、ヒクンと肩を窄めるジャンヌ。

確かに肉体的な快感の大きさには圧倒されんばかりだが、それだけならまだなんとかしのげるはずだった。

しかし、膣肉を抉られるたびに胸奥を震わせる情感がこみ上げて、心の防壁を崩そうとする。その感覚はどこか甘く切なく、キュンと心臓を締めつけるような不思議な感覚だった。

(な、なんなの……この感覚……)

肩越しに吐きかけられるオーガの荒々しい呼吸にも、ゾクゾクとうなじが鳥肌立ってくる。分厚い胸板に密着する背中が熱くなって、背骨まで溶け崩れそう。漂ってくるオーガの獣臭を嗅がされて、脳内に熱い血流が駆け巡る。

鼓動が速くなり、呼吸が乱れて、とても平静ではいられない。

「うあん……わ、わたくしに……なにをしたの？　なにが……起こっているの……？」

自身の変化に怯えて視線を彷徨わせるとジェリクと目が合った。

しかしダークエルフは赤眼を細めて嗤うばかりだ。

「そのうちハッキリとわかるようになる。今は子を孕むことだけ考えていろ」

ジェリクの黒髪が魔力にたなびき、ジャンヌの足元の床に魔法陣が浮かび上がる。その中心から、無数の触手が這い出てきた。

「ああ……そ、それは……!？」

「覚えているだろう、『天使殺し』だ」

『天使殺し』とは天使の聖なる力を食い尽くす、恐るべき魔生物である。

数日前この魔物によってジャンヌは射精アクメを味わわれ、光翼の力を奪われてしまったのだ。

「ククク、やれっ！」

ギュルルルッと黒い触手が伸び、王女のクレヴァスに迫った。ヌルヌルと濡れた表面は、小さな棘^{とげ}にびっしりと覆われ、勃起した男根のような太さと硬さを兼ね備えていた。

「ひあああああつ！　いやあああああつっ!!」

鋭い触手の先端が、オーガの巨根を埋め込まれた蜜孔の隙間に忍び込んでいく。

「うあああつ！　そんなの……無理い！　こ、壊れちゃうっ!!」

すでに限界近い拡張を強いられている粘膜が、さらに押し広げられる。身体が真つ二つ

に裂けてしまいそうな衝撃だ。

「お前の性器改造は完璧だ。それくらいで壊れはせん。それに淫乱天使のお前にはきついくらいが丁度いいだろう」

ジェリクが嘲笑するが、ジャンヌに反論する余裕はない。ミシミシと股関節を軋ませる侵入に、息も絶え絶えといった様子だ。

そのくせ膣奥からは、ドクドクと牝蜜が湧き出してきて触手を濡らしていく。柔褻は天敵を誘うようにヒクヒクと蠢いてしまう。

(ンン ああっ……か、感じないで……感じてはダメよ！)

凄まじい亜人たちの輪姦調教を思い出し、身体の芯がジーンと震える。それが恐怖なのか、快感への期待なのか、自分でも判断がつかなかった。

王女が狼狽える間に、オーガの勃起の脇をすり抜けた触手が子宮口に到達した。しかし触手はそこで止まらない。細く尖らせた先端が子宮口に食い込んでいく。

「あつ、ああああああつ！ は、入って……きちゃう……きちゃうううっ!!」

信じられないことに、魔手は限界を超えてさらに奥深く、女の生命の中心を目指してねじ込まれてくる。発狂しそうな責めの連続だった。

「い、いや……もう、いやあああつ!!」

「グフフフ。どんなに嫌がっても身体は素直だ。また濡れてきたぜ。欲張りなマ○コだな、天使様よお」

亀頭に熱い潤いを感じ取り、得たりとばかりギドーが嗤う。

「あう……そんな……はぁんっ……どうしてえ……」

天使の天敵といわれる魔物に子宮まで犯され、どうして濡らしてしまうのか。もう自分自身がわからなくなってくる。

「お前の身体と魂が、その快感を覚えているからだ」

ニヤリと嗤うジェリク。その赤い瞳が王女の胸中を覗き込むように鋭く細められる。

「『天使殺し』よ。ジャンヌの力を吸い取ってしまえ！」

「キシヤアアアアアアッ！」

ジェリクの命令で『天使殺し』の触手が胎内で蠢き、天使の力を吸引し始める。

「あああ——ッ!!」

魂の源泉ともいえる場所から聖気を吸われ、天使の姫は喉が裂けそうなほど悲鳴を張り上げた。

全身から力が抜け、意識まで吸い取られてしまいそうだ。

それに合わせて、ギドーが猛然と動き始める。

「グハハハ！ いよいよオーガの子を妊娠させてやるぜっ！」

「ンああああっ！ そ、そんなの……いやよ！ は、はうっ！ やめて……放して……ああうんっ！」

重力加速度を加えた律動が、何度も子宮を直撃した。内臓が突き上げられ、口から胃袋

が飛び出しそうだ。

「うう……ジ、ジャンヌ様！」

そのとき失神から覚めたキースが悲鳴に近い声を上げた。

「グフフ。お目覚めかい、騎士長さんよ。愛しのお姫様がオーガの子を妊娠させられるところをよく見ておくんだけ」

「オ……オーガの子だと……そんな馬鹿な……そんなことができるはずがない！」

俄には信じられない話を聞かされ、拘束された身体を足掻かせるキース。

「あつあん……み、見ないでえ……！」

愛する青年の視線を感じ取り、王女は胸を切り裂かれるような羞恥に襲われる。だがキースの視線は人間の数倍はあろうかという巨根に結合された姫のクレヴァスに釘付けになった。

今にも壊れてしまうのではないかと思うほどの拡張を強いられているのに、桜色の粘膜はしっかりとオーガのイボだらけの肉棒とどす黒い触手を喰い締めている。しかも巨根との隙間から、濃厚な牝蜜を溢れさせているのだ。苦しげに悶絶する表情にも時折、見る者がハッとするような陶酔の笑みが浮かぶ。ジャンヌが人外の陵辱に快感を得ているのは明らかだった。

さらにお腹の上に赤々と輝く呪紋様。その意味は騎士長にはわからなかったが、それが王女をさらに苦しめていることは理解できた。

「説明してやろう。ジャンヌは寄生体によって子宮も卵巣もオーガの牝と同質に改造されているのだ」

「なんだって……!?」

「そして今、騎士長殿の愛を注いでもらったお陰で、強制受胎の呪文が完全に発動した。妊娠する確率は十割。ククク、感謝するぞ、騎士長殿」

「そんな……ことが……」

「グフフ。なかなか優秀な当て馬だったなあ。種付けは俺に任せろよ」

絶句する青年騎士を嘲笑い、ギドーはピッチを上げていく。

「あつ、あつ、あああああつ！」

ズボズボと蜜肉を攪拌されて、ジャンヌはあられもない恥声を噴き上げた。

「ジャンヌ様！」

「ああつ……見ないで……キース……見ないで」

愛する人の前で犯され、天使の力を奪われ、さらに宿敵の子を妊娠させられるのだ。なんとこの屈辱だろう。これほどの辱めを受けるくらいなら舌を嚙んで死んでしまいたかった。

しかし怒濤の勢いで叩きつけられる快感の熱波が、王女に死を選ぶことすら許さない。暴れる触手が子宮の中を舐めるように力を刮ぎ取っていくと、指一本動かすことすら困難になってしまう。

その一方で肉体はさらなる快感とギドーの精液を求めて淫らに燃え上がった。

植えつけられた奴隷の本能が目覚め、ご主人様の精を受け、その子を妊娠したいという、異常な願望を掻き立ててくる。

「ククク。妊娠したら、お前のいやらしいポテ腹姿を晒しモノにして、国民の前でオーガの子を出産させてやるからな」

「そんなの、いや、いやあ！ あうう……妊娠なんていやなの……い、い、いっ！」

泣き叫び、ブロンドを振りたくるジャンヌ。しかしいつしか腰は、ギドーの撃ち込みにタイミングを合わせるようにうねっていた。

できるだけ奥深くまでくわえ込み、精を搾り取ろうと柔腕をまわりつかせていく。きつい収縮が男根と触手を螺旋状に締め上げた。

「おお、また一段とよくなってきたぜ」

腰を震わせるような快感と、生意気な王女にいいよ決定的なダメージを与えられる昂奮で、オーガの岩のような顔面が真っ赤になる。脳内でアドレナリンが湧出し、オーガ族特有の凶暴な獣性が目覚めてくる。

「グフフ。オマ○コがグチョグチョだぞ。好きな男の前で浅ましい女だぜ」

串刺しの勃起を揺さぶって、いやらしい粘液の音を響かせる。

「あうう……ち、違う……感じて……ない……」

「乳首もクリトリスもピンピンに尖らせて、よく言うぜ。この変態王女がああっ！」

左手でブロンドを驚づかんでたおやかな喉を仰け反らせるや、そこに鋭い歯列で噛みついた。

「きやああああああああああつ！」

痛みよりも驚きで、ジャンヌは悲鳴を上げる。このままに喰い殺されるのではないかという恐怖が身体を緊張させ、膣肉がギュウツと男根を喰い締めた。

「ハアツ！ ハアツ！ いいぜえ。チンポが食いちぎられそうだ」

僅かに肌が傷ついたのか、天使姫の血の味が口中に広がる。それをうまそうに舐めながら、ギドーは狂ったように腰を動かした。

「よく見ておけよ、優男^{やうなん}。ジャンヌはお前みたいな粗末なチンポじゃ満足しねえのさ。オーガのデカ魔羅で虐められないとイケない、マゾ牝なんだよ！」

ズブズブッ！ ジュブッ！ ドシュッ！ ズリユリユッ！

「ジャンヌ様！」

「うあつ！ ああ…ンっ！ キース…：ラめ…：ラめえ…：っ！ 見ないレえッ！」

腹を突き破られそうな打擲^{うちうちげ}が、続けざまに子宮に叩き込まれた。振動が触手にも伝わって、火の玉のような快感が胎内で炸裂し、その衝撃が消え去る前に次の爆発が起こる。

衝き込まれては鋭い亀頭に子宮口を抉られ、引き抜かれては肉イボにイヤというほど粘膜を摩擦される。電撃のような快感が背筋を駆け上がつて、脳幹をハンマーのように直撃した。

「お前の口から言つてやれ。騎士長殿も諦めがつくだろう」

ジェリクが天使殺しの触手をつかみ、呪力を込める。すると触手がさらに活性化して、子宮や卵管の中で激しくうねくった。

「い、いやあつ！ そんなこと……あう……言えない……」

女のすべてを犯され尽くされ、さらに天使の力を吸引されて、自我の壁がピキピキとひび割れる。

「言わねえと、俺の手下どもがあつた男を……わかっているな」

「あ、ああ……」

脅迫の台詞を囁かれてはもう逆らえなかった。

「キース……わ、わたくしは……」

涙に濡れた碧眼で騎士長を見つめる。ここまで調教され、汚された身体でキースと結ばれるなど許されるハズがないではないか。自分にはオーガに犯され続ける運命が相応しいのではないか、という諦念が湧き起こる。

「ああ……ジャンヌは……マ……マゾ牝です……もう……ギ、ギドー様の……あうう……ギドー様の……遅しい……オ、オチンチンでないと……満足できないの……」

言い終わると同時に涙がポロポロこぼれた。どす黒い絶望が愛し合う二人を引き裂いていく。

「ジャンヌ……様」

キースもまた、魂を抜かれたような表情を浮かべていた。ジャンヌの言葉が強要されたモノだということはすぐにわかったが、あの気高く強かった王女がここまで調教されてしまったことに慄然とする。

「グフフ。いいぞ。もっともつと感じろ、ジャンヌ。感じて俺の子を孕むのだ！」

首に舌を這わせ、歯を立てながら、最奥まで巨根を撃ち込む。

「い、いやよ……それだけは……亜人の……オーガの……赤ちゃんなんて……いやあああ
っ！ 死んでも……いやよ……ああーん！」

骨盤が割れてしまいそうな衝撃で、筋肉も内臓も意識までもバラバラに碎かれてしまいう。身体中の神経が膣に繋がれてしまったように、全身がギドーの肉勃起を感じる。

「口では嫌がっても、お前の子宮は妊娠したがつているぜ」

「うっ……うう……ああああ——っ！」

毛穴という毛穴が開いて甘酸っぱい蜜汗が噴き出した。背中で拘束された両手が、白くなるほど強く握られる。

極太に犯され続けるクレヴァスから、ドブドブと熱い花蜜が溢れ出て、ギドーの陰毛や陰囊をベっとり濡らしていく。

持ち上げられた右膝がギクンギクンと跳ね回り、つま先が丸まって痙攣した。

「ジャンヌ様！」

なんとか励まそうと声をかける騎士長だが、狂悦に灼かれる王女はそれに応えることが

できない。

「ひっ、ひいっ！ キ、キース……ンああ……キースウッ！」

恐怖と絶望を刻まれながらも、肉体は夢幻の高みに上昇していく。

胎内にばらまかれた火の粉がいよいよ一つに収束し、巨大な火柱となって王女を内側から焼き尽くした。

「ふあっ！ ンああああああああああつっ！ き、きちやううっ！ きちやうううっ！！」

ギリギリと砕けんばかりに歯を食いしばって、美貌を仰け反らせるジャンヌ。断末魔の痙攣が媚肉を収斂させ、ギドーの勃起を搾るように締めつける。魂まで搾られそうな快感に、ギドーもついに射精を迎える。

「ウハハハハッ！ イけ、ジャンヌ！ 恋人の前で妊娠しながら、イってしまえっ！！」

ドバドバドバッ！ ブシユアアアアアアアアッ！！

子宮口に押し当てられた尿道口から、凄まじい勢いで獣精が噴き出した。

「いやあああああつっ！！ 出さないでっ！！ あ、あついいいッ！！」

最後の願いも虚しく、膣内にオーガの精液が溢れ返って渦を巻く。媚褻の隙間に、子宮口の奥に、無数の精子が灼熱の矢となって突き刺さった。

「うああああああつっ！ イク、イクウッ……イッちやうううッ！！」

大量の精液を注ぎ込まれた王女の裸身が、弓なりに反る。金髪がバラバラに乱れ、釣ら



れた魚のように身を震わせた。恍惚の痙攣がつま先から頭の先まで駆け抜ける。

「グハハハ！ ついにやったぜ！ これでジャンヌは俺の奴隷妻だなっ！」

ギドーの勝ち誇った嗤いを、ジャンヌは絶望に打ちひしがれながら聞いた。

（ああ……とうとう……オーガの……子を……）

碧眼に見る見る涙が溢れ、頬を伝い落ちていく。

「まだだ。休んでいる暇はないぞ」

ジェリクが『天使殺し』に合図を送ると、子宮を犯していた触手がビクビクッと脈動した。直後、ジャンヌは子宮内に熱い迸りを感じさせられる。

「ひあああああつ！ な、なに……？ なにかが……ふああ……で、出てるう……!?」

「それはお前がかつて射精した寄生体の精液だ。お前は寄生体の卵も孕むのだ」

「そんな……」

気が遠くなるようなダークエルフの言葉だった。オーガの子を身籠もらされたうえに、自身の精液でおどましい魔生物の卵まで孕まされてしまうのだ。

「よかったじゃねえか。グフフ。俺の子も兄弟ができて寂しくなかう」

悪鬼そのものの笑みを浮かべ、ギドーが再び膣肉を突き上げてきた。射精した直後だというのに肉槍はまったく衰えず、強烈な快感をぶち込んでくる。

「うああああああん！ も、もう……しないで……いや、た、卵なんて……ニンヒンさせないレえ！ あ、ああん！」

「ジ、ジャンヌ様あ！」

もはやキースの声も耳に入らないのか。想像を超えた妊娠アクメに狂わされていくジャンヌ。ドクンドクンと子宮内に魔精を注がれ続けて、絶頂状態から降りられなくなってしまう。そこをギドーの極太にこれでもかと衝き抉られ、凄まじい快感が立て続けに爆発した。

「グハハハッ！ もう一発くらええっ!!」

ドピユドピユッ！ ズビユウウウウウツツ！

一度目を上回る勢いで噴き出た牡精が、緩んだ子宮口から胎内に流れ込む。魔物の精液と混ざり合い、子宮の内側を卵管を目指して遡る。

「あああああああつ！ また……イ、イクツ……イクイクツ！ イっちゃうううっ!!」

ドクンドクンと連続して胎内に衝撃が走った。それは淫呪で作られたジャンヌの卵子がオーガや寄生体の精子と受精した瞬間であった。

頭の中で赤い火花が散り、目の前の光景も真っ赤に染まる。ジャンヌにとってそれは天国の光にも、地獄の炎にも思えた。

「ふあ……ああ……もう……うめえ……」

碧眼が光を失い、ガクンと頭が落ちた。ふいごのように喘ぐお腹の上で、紋様が青色に変化していく。

「フフフ。受胎成功だな。すべては計画通り……」

「このでかい乳も最高だな。いい母親になれるぜ」

オーガたちが大きく弾む乳房をタップと揉みながら、勃起乳首を指の腹でしごき上げ、快楽を搾り取っていく。

「胸……あああッ！」

真つ赤なニップルの先端から快美の稲妻を撃ち込まれ、ジャンヌは絶叫した。

（キースの前で……みんなの前で……わ、わたくし……どうしてこんなに感じて……！）

心ではどんなに拒否しても、暴走を始めた肉体はもうどうにもならなかった。蟻地獄にはまるように、足掻けば足掻くほどマゾの魔悦が絡みついてくる。

精液が欲しくてたまらなくなり、頬を窄ませる強烈な吸引で、ギドーの射精中枢を刺激する。

「グフフ。最高に気持ちいいぜ。妊娠すると唇までエロくなりやがる。お前も気持ちいいだろう？」

「ふはあ、はあ……ああああつっ!! い、いっつ! お、お口でも……気持ちいいの!」
追いつめられ、避けることのできない頂上が間際であることを自覚させられ、錯乱の声が漏れた。

「ジャンヌ様……」

キースは呆然と陵辱の姫君を見つめる。あの高貴で無敵とも思える剣技を誇ったジャンヌが、醜いオーガに奉仕し、自慰行為にヨガリ狂っているのだ。

汗に濡れた頬に金髪が貼りつき、碧眼は被虐の悦びに潤んでいる。極太に犯される唇から、涎がダラダラ零れ落ちる。

その淫蕩な表情は、自分との性交では見せなかった顔だ。さつき聞かされた『オーガ族専用の孕み奴隷』という言葉が頭をよぎる。

皆で見たときよりも遙かに淫らな乱れようで、忠臣であるキースには信じ難い光景だった。

「ふふふ、よく見ておけ、これがお前たちの愛した王女の本当の姿なのだ」

ジェリクがうなだれるキースと観衆に向かって宣言するように言い放った。愛し合う二人が引き裂かれ、民の心が絶望に染まっていくのが手に取るようにわかり、歪んだ狂笑を浮かべている。

「ああん……見て……みんな、わたくしを見てえっ！」

大きな乳房と膨らんだお腹をユサユサ揺すりながら恥声を上げる淫らな妊婦姫。

手にした淫具で柔褻がまんべんなくかき混ぜられ、子宮がグイグイ突き上げられる。子を宿し、内側からの圧迫を訴える子壺を責め立てると、母性が身体中の細胞に染み込んでいくようだ。

「ああうっ！ あ……赤ちゃんが……」

我が子への母性がマゾの肉悦と絶妙にブレンドされ、極上の貴腐酒のように王女の肉体を醗酵させていく。背筋を駆け抜ける快感で、お尻がブルブルッと震え出す。パンプスの

つま先が反り返り、白い背筋が縦筋を刻んで痙攣した。ブロンドとロングベールが大きく揺れて、唇がギドーの男根を根元まで呑み込もうとする。

（だ、だめ……なのに……手が……お口が止まりませんの！）

大切な我が子に負担をかけてはいけないと、『女』の本能が訴えている。だが一方で浅ましい『牝』の本能が、急激に熟しつつある媚肉を責めずにはおかぬ。

「そんなにオマ○コをズボズボやっていると、お腹の子に悪いぜ、孕み姫様」

「う、う……む……」

顔を小刻みに振りながらも、自虐の手は一向に止まる気配を見せない。

人造亀頭に突きまくられる子宮が溶鉱炉のように熱くなり、快楽の熱波を全身に送り込んでいく。

疼く子宮がいやでもギドーの子の存在を意識させ、女としての幸福と絶望が同時に脳内で煮え立った。

擦られ続ける膣壁からは白く濁った濃厚な本気汁がドロドロ溢れて、秘裂から伝い落ちていく。

「そろそろイクのか。民や好きな男の前でボテ腹晒して気をやるとは、やはり牝だな」

そんな嘲笑も、もうジャンヌの耳には届かない。

ギドーの男根に奉仕するうちに、これまで感じたことのない強烈な快感が、王女の胸奥にジワジワこみ上げていたのだ。

その心を満たすような甘い充足感、騎士長との情交のときに感じたモノによく似ていた。

「はあああッ！ どうして……どうしてこんなに感じちゃうの……んちゅぷッ！」

挟まれる媚肉の快感が数倍跳ね上がる。逃れることのできない快樂の牙が、自我を噛み砕く。それは恐怖ですらあった。

「フフフ。それはお前たちが愛し合っているからだ」

ジェリクの赤目が鋭く細められる。

ジャンヌが気づかぬうちに、寄生体が植えた偽りの『愛』の感情は、妊娠を通じて大きく育っていた。肉体のみならず神聖な愛という感情まで淫呪に蝕まれては、さすがの天使姫も陥落は時間の問題だった。

「ぐへへ、そりゃそうだ。やっぱ夫婦は愛し合わないとな」

ギドーが顔をほころばせる。肉体に較べて心理面の調教がなかなか進んでいなかっただけに、ギドーにとってジャンヌの劇的な変化は僥倖だった。

征服する悦びがペニス全体にさらなる精気を与え、牡蜜を吐き出す亀頭がもう一度女王の唇をこじ開けていく。

「そんなッ！ わ、わたくしはあなたなんか……ッ！ うあああッ……ッ!!」

極太を食道にまで押し込まれ、ブロンドを波打たせるジャンヌ。この悪魔のようなオーガを自分が愛するなどあるはずがない。

「うっ……うふうん……っ！」

だが、口唇を挟まれるたびに湧き起こる幸福感や、ギドーに対して感じ始めている甘く酔うような感覚は、キースに抱擁されたときのと きめきを呼び起こす。

「お前は俺のモノだ。絶対に放さねえ」

「んんっ……ンああああん！」

ギドーに囁かれると鼓動が高鳴り、呼吸がどんどん速くなる。陶酔感が脳を浸して、これまででない昂奮状態に追い上げられていく。瞳からは絶望の涙をこぼしながらも、勃起をくわえた唇には淫らな恍惚の笑みが浮かんでしまう。

（そんな……わたくし本当に……ギドーのことを好きに？ ああ……ち……ちがう……そんなはずはあ……！）

歪められた愛情を糧に、臨界を越えた快楽が脳の中を桃色に霞ませる。舌が男根に巻きつき、理性を失った手が淫具をグリグリ子宮に押しつけた。

その刺激に驚いたのか。王女の子宮の中で胎児がピクリと動き、一瞬ジャンヌの肩が跳ねた。

「フフフ。子供よりも快感を貪るほうに夢中か。呆れた母親だな」

（あ……あ……）

ジェリクの言葉が鋭いナイフのようにジャンヌの胸に突き刺さる。

（最低……わ、わたくしは……最低……ですわ）

我が子を顧みず、淫具を子壺に突き立てオナニーに耽る母親……。これではまるで動物以下ではないか。

そう思ったとき、ジャンヌの中でまた一つ大切ななにかが剥がれ落ちた。それが転落の快感を呼び起こし、灼けるような官能の火柱が脊椎を駆け抜けていった。

「あっ……あっ……あぁっ！ 赤ちゃん……許してッ……ンはあぁッ……！ ジャンヌは……最低なの……オ、オマ○コも……お口も……くちゅ……き、気持ちいいッ!! ちゅば……たまらないのおっ!!」

国民を絶望に叩き落とすような猥褻な台詞が、情熱的なフェラチオの合間に後から後から出てくる。極太淫具が円を描くように膣孔にねじ込まれ、唇も積極的に男根を吸いしやる。

「グハハッ！ どうだっ！ 妊娠する前よりグンと気持ちいいだろう」

ギドーが妊婦姫のクレヴァスの様子を眺めながら訊いた。

熱い蜜肉がイボだらけの責め具をゴムのように締めつけたかと思うと、とろけるような柔らかさで迎え入れる。妊娠によって熟成された、究極ともいえる弛緩と収縮を併せ持つ最高の媚肉が完成されつつあった。

あそこにぶち込めば、至高の愉悅を得られるに違いない。淫らな期待がギドーの射精欲求を急激に高める。

「まったく、こんな淫乱な母親じゃあ、子供も大変だな」

「それに、ボテ腹も見慣れると、すげえ色っぽいな」

オーガ兵たちも昂奮した様子で、妊婦姫のお腹に勃起を擦りつけ始めた。

受胎の紋様が浮くドーム状の肌に肉棒が食い込み、牡蛎を塗りたくる。なんとも背徳的な光景に、国民も息を呑んで見守るしかなかった。

「ンアアアアッ!! イ……イイッ!! に、妊娠したから……赤ちゃんがいるから……気持ちいいのおッ!」

孕み腹を刺激されて母性が燃え上がる。そしてそれさえも淫らの燃料として、快楽を貪ってしまふ。

「その気持ちいい赤ん坊は誰の子だ? 誰の子供で感じているんだ?」

「はあ、はあ……ギ、ギドー様とジャンヌの……赤ちゃんですわ! くちゅっ! オーガ様の……赤ちゃんで感じてますわ! チュパッ!」

大勢に見られていることも忘れてジャンヌは叫んでいた。そして口にしてから実際にその通りだと思ひ知らされる。媚肉が熟成されてしまい、官能の濃さがこれまでとは比較にならないほど濃い。

さらに、一突きごとに感じさせられる赤ちゃんの存在が、原始的で本能的な牝の悦びを脳の奥底から引きずり出そうとする。子宮の内側が敏感になり、胎児の形まではっきり感じ取れそうだ。

「ひひひ、じゃあ懐妊祝いだ!」

「変態マゾ妊婦にはお似合いだぜ！」

お腹に擦りつけていたオーガ兵たちが次々に射精し、白濁を孕み腹にぶちまける。

「あひいいっ！」

べっとり貼りつく粘液の熱さが子宮に滲みて、ジャンヌを狂わせる。

「ああ……許して……赤ちゃん……も、もう……オマ○コ……あう……たまらない……」
詫びながらも張り型を操る手はますます過激になり、腰が牝蜜の雫を飛ばしながら、8
の字を描いて舞う。

罪悪感も身も心も肉悦に支配されていく恐怖が、マゾの虐悦と溶け合って、ジャンヌを
これまでにない官能の頂へと追いやった。

「ひああっ！ もうだめえええ!! イク、イクッ……イクウウウッ!!」

断末魔の悲鳴が会場の壁を叩き、絶頂の収斂が張り型を食いちぎりそうな勢いで締めつ
ける。仰け反った美貌に、ギドーが男根をくわえ込ませた。

「くおおおっ！ 食らええっ！」

胃に食い込ませる勢いでトドメの一撃をドスツと突き入れ、オーガは咆哮した。

ドピュウウウウッ!!! ブッシュウウウウッ!!!

「ムゲウッ！ ンムゲゲグウウウッ!!」

胃の底に灼熱の腐粘液をぶちまけられ、ジャンヌはギクンと仰け反った。パンプスのつ
ま先がキュッと反り、白グローブの指先が痙攣しながら床を引っ搔く。

ギドーの精力は凄まじく、射精も長い。ドクドクと脈打ち続ける肉棒からは、後から後から白濁精液が注ぎ込まれてくる。

精液をこぼすまいとジャンヌはゴクゴクと喉を鳴らして飲み下した。

重さを感じるほどの精液の塊が胃の中へ、いや魂の中へと染み込んでいくのがハッキリわかる。

(……わたくし……もう……)

熱さとともに歪んだ幸福感を魂に刻み込まれ、王女はガククリと全身を虚脱させた。

気がつくときジャンヌは奇妙な台に乗せられていた。後ろに大きく傾斜したほぼ仰向けの椅子のようだが、お尻の下に座面はなく、代わって両膝を固定する二本の梁が取りつけられている。それによりガーターストックキングに包まれた両脚はV字に割り広げられ、聖域を完全に衆目に晒す格好になっていた。さらに両腕は頭の後ろで交差させた形で革ベルトで拘束されている。

「はあ、はあ……」

これ以上ないほどの痴態を晒してしまい、絶頂の余韻と自己嫌悪で身体が重かった。

(わたくし……みんなの前で……なんてことを……)

これまでも陵辱を受けたあとには、こういった気だるさを味わわれたが、今はそれに満ち足りたような充足感を伴っていた。あたかも、愛する夫と初夜を過ごしたような幸福



「そんな……もう……産みたくないの……っんく！ これ以上産まされたら……こ、壊れ……ああああああンっ！」

太い血管を巡らせた巨根が、これまで以上の勢いでズブリと撃ち込まれる。鋭い肉槍の先端は子宮の底にフタをするように食い込んだ。

「まだまだ、こんなもんじゃないって言っているだろうが」

そのまま腰に体重を乗せ、二度の出産で緩んだ子宮口をジワジワ貫通していく。

「お前の子宮に中出ししてやる。腹がへこむ暇も与えねえ。今すぐ次の子を孕ませてやるぜ」

「そ、そんなあ……あああンンっ！」

出産しながら妊娠させられるという、想像を絶する責めだった。一体そんなことができるのかわからないが、強制受胎の紋様はまだ残っている。オーガの精力と墮天使の魔力をもつてすれば、神をも冒瀆する悪魔の所業も可能かもしれない。

「いくぜえ！ うらあああっ！」

ジワッジワッと長大な肉棒が埋められていく。女の限界領域を突破し、牝の快樂ゾーンへ侵入していく。

「うあ……ああ……」

子宮口を拡張されるにつれてこみ上げる快樂。産卵アクメを味わった身体は、恐ろしいことに、もうその異常快感にも馴染み始めている。

ビクビクと小刻みに痙攣しながら、ガーターストッキングの太腿が大胆に拡がり、浅ましくも牡を迎え入れる体勢を取ってしまう。その中心を、重く深く、魂まで犯す勢いで、鋭角に広がった肉の楔が打ち抜いた。

「ンあああああつ……ヒ、ヒインッ！」

子宮口をこれまでと逆方向から擦り上げられ、ギクンと身体がずり上がる。ついにオーガの巨根が子宮内に到達したのだ。

身体の芯を駆け上がった紫色の火花が、脳内で激しくスパークし、意識が一瞬飛ばされた。つま先が何度も反り返る。

「もうだめえ……そんなに……奥まレ……入れられたら……あつ……あああつ！　イ、イクウッ！」

呼吸もままならないほど昂ぶった身体が、汗を光らせて揉み搾られる。嬌声に捲れた朱唇の中で、白い犬歯がキリキリと噛み締められた。

「すごい……あんなデカブツが根元まで……」

「ありゃあ、子宮にまで届いてるぜ……」

壮絶な子宮陵辱を見せつけられて、国民たちは息を呑む。そして改めてオーガ族の恐ろしさを実感するのだ。

「はあ、はあ……あふつ……ンン……ギドー様……はああンンッ！」

オルガの硬直がほじけたとき、王女の表情は淫悦に染まりきっていた。激流は去っても

細かな痙攣がビクンビクンと四肢に走っている。イキっぱなしの肉体は相変わらず絶頂から降りられない。

「ぐふふ、最高の牝だぜ、お前は」

亀頭を包み込む熱く溶けた母胎の感触は、貪欲なオーガですら喰るほどの快感だった。膣孔と子宮口の二ヶ所の締めつけで、少しでも気を抜けば射精に追い込まれそうだ。

しかしそれ以上に追い込まれているのはもちろん王女のほうだ。出口を塞がれた卵が、子壺の中で暴れているのだ。

（ン……はぁ……っ！ はふうっ……もう、イキたくなヒ……のに……イクのが……と、止まりませんのお……）

お腹が裂けそうなほどの膨張感なのに、快感がすべてを呑み込んでいく。焦れるようによじれる腰は、男のすべてを吸い込もうとするかのように積極的だ。

「あ……おぁ……ンッ……は、はぁぁンッ！ お腹が……お腹がぁ……！」

快感と産卵欲求で子宮がはち切れてしまいそうだった。だが、極太ペニスで子宮口を完全に塞がれていてはそれがかなうはずもなく、もどかしさが膨れたお腹の中で煮えたぎる。ビクンビクンと痙攣が走るたび、滝のような汗が、張りつめた腹筋の上を流れ落ちていく。身体はすっかり産卵アクメという狂悦を覚えていて、それを望んでいるのだ。それはもはや剥き出しの牝そのものの浅ましい欲求だった。

だがギドーは挿入したまま動かず、いやらしい嗤いを浮かべてジャンヌを見下ろしてい

る。王女が自ら最後の深淵に転落するのを待っているのだ。

「はあ、はあ……うう……」

もっと動いて欲しい、もっと激しく子宮をかき回されたい。そんな言葉が喉からこぼれそうになる。

今も肉体は軽いエクスタシーの波に揉まれ続けているのだが、胎内に残った卵が突き抜けるような絶頂を妨げていた。

（このままじゃ……わたくし……狂っちゃう……）

陣痛の甘噛みを子宮に感じながら、爛れた脳が解答を導き出す。ギドーを満足させるしかこの淫獄から逃れられないのだ。

（あ、ああ……もっと……もっととお……）

腰がもぞもぞ動き出し、男根を呑み込み始める。粘膜の締めつけも増して、イボだらけの幹を磨き上げていく。牝蜜がドロドロと溢れて、はしたない水音を響かせるが、もう構っていられなかった。

（もっと……もっと……奥まで犯して……！）

調教完了の肉体が、一足先に完全屈服していた。ギドーのモノに馴致され尽くしてしまった肉体は、もう一生死ぬまで、この男が与えてくれる愉悦から離れられないだろう。

「素直におねだりしたらどうだ？ 俺はお前の夫だ。遠慮はいらねえぜ」

子宮と膣肉に肉イボを交互に食い込ませながらギドーが迫る。ついに剣姫を墮とすとき

が来たと確信したのでろう。元々赤黒い肌が、昂奮でますます赤く染まっていく。

「高貴なる王女……一騎当千の魔法剣士……天使の血脈……すべては虚飾、幻でしかない。そんなものは捨ててしまえ」

さらに追い打ちをかけるようにダークエルフが耳元で囁いた。

「今、お前を貫く快楽こそが真実。オーガに犯され悦楽に狂う淫らな牝獣……それがお前の本当の姿なのだ」

「あ、ああ……」

ジェリクの言葉に鼓膜をくすぐられるたび、ゾクゾクッと背中が戦慄く。

「ギドーと結ばれることこそが、お前の幸福だ。それ以上の悦びなどあるはずがない。そうだろう？」

言葉が麻薬のように脳を冒す。自分を犯す巨軀のオーガが夫になるのだと思うと、得も言われぬ悦びが心の底から湧き起こる。

「あっ……あっ……はああンッ!! ギ、ギドー……様あ……」

切なく反った乳の先端から母乳を漏らし、被虐の花嫁は甘えるような媚態を浮かべて陵辱者を見つめる。

「素直に言う気になったか、お姫様？」

目が合ってドキリとし、内心を言い当てられてさらにギクリとする。心のどこかで、この醜いオーガに心を奪われていく自分を感じる。国や家族、騎士長のことすら、頭の中か

ら消えていく。

「お、お願い……………です」

唇がほとんど無意識に動き出し、自分がなにを言おうとしているのかも、もうわからない。

「……………動いて……………ああ……………もつと……………もつと、激しくして……………ください」

少し舌足らずになりながら、男心をとろけさせる甘い口調でおねだりしてしまうジャンヌ。

その姿を見て、ギドーとジェリクは顔を見合わせてニヤリと嗤った。ついにジャンヌの心をへし折ったという確信が、男たちに無上の喜びと昂奮を与えてくれる。

「そんな言い方じゃダメだな。もつと国民に聞こえるように言うんだ」

耳元に囁かれてジャンヌはコクンと小さく頷き、光を失った碧眼でオーガをジッと見つめる。

「わ……………わ、わたくしを……………ジャンヌの……………は、孕みマ○コを……………ギドー……………様の……………」

白濁を絡ませ、ワナワナ震える唇が紡ぐ言葉を、観衆は固唾を吞んで見守っている。それまでの狂宴が嘘のように、場内は静まり返った。みんなにも聞かれているのだという恥辱も、被虐のスパイスであった。

「……………ギ……………ギドー様の……………ぶつとい……………イボイボのオ、オチンチンでえ……………犯して……………犯して……………ください……………ああ……………もう……………メチャクチャにしてえっ！」

ついに心の壁が崩壊し、ジャンヌは裡から押し寄せる淫らな欲求をそのまま口にした。屈辱も悲しみも、すべて快楽に溶けていく。

「では、俺を愛しているのだな」

ニヤリと嗤って最後通牒を突きつけた。

「あ、あ……」

ブルブルとジャンヌは震える。目の前の屈強なオーガの男。目と目が合うと胸がときめき、頭の中が沸騰する。媚肉がジュンと濡れ、溶け落ちそうなほど熱くなった。

肉の火照りが心を焼くのか。心の情炎が肉を焼くのか。今のジャンヌにとってどちらも同じことだ。心狂わせる激しい情動を愛というなら、それで構わない。

「ギドー様……」

絶大な快楽を与えてくれるこの男に……。

「ジャンヌは……ギドー様を愛してます♥」

すべてを捧げたい……。

「グアハハハハハハッ！ よく言った。褒美をやるぜ！」

沈み込む観衆と対照的に、ギドーは上機嫌で嗤う。文字通り身も心も奪い尽くした、完全勝利である。

もう拘束の必要もないと判断し、ジャンヌを貰いたまま拘束台から抱き下ろした。そのまま正対する座位に移行する。



「ヒキイッ！　お、奥まで……きてますのおッ！」

体重がかかって、子宮に杭のような男根が深々と突き刺さった。ジブブウツと蜜が溢れ出て、妊婦の太腿を濡らしていく。

「ンああああああああっ！！　い、いいッ！！　気持ちいいッ！！」

深々と掘削され、妊娠中の子宮に亀頭が食い込む衝撃に、ジャンヌは絶叫していた。これほどの快感を、なぜ今まで拒否していたのかがわからなくなる。

「国民や恋人が見ているのに、そんなによがっているのか？　みんな呆れているぜ」

ギドーが王女を垂直に突き上げながら、意地悪な質問を投げかける。

「ああ……もう……ジャンヌは……ギドー様じゃないと……ダメなんです……んあつ……ジャンヌは一生死ぬまで……ギドー様の……奴隷妻です」

王女としての誇りも、愛する人への純真も、周到的肉欲奸計の前に粉々に砕け散った。空っぽになった心を、偽りの『愛情』が一気に桃色に染め上げていく。

「グフフフ。じゃあ、俺のことを好きになったんだな。俺と結婚したいんだな？」

トロトロに溶けた蜜壺に、力強い律動を刻みながらギドーが訊いた。

「はあ、はあ……ああ……はい……ギ、ギドー様のこと……だ……大好きです……ギドー様だけを……あ、愛します……ンあつ……ジャンヌは……ギドー様と……ギドー様と……ああ……け、結婚……したいです……はううン！」

言い終わると同時に、ジャンヌは感極まったようにブルブルと身体を震わせる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

全国書店で
**好評
発売中**

借金返済のため、お嬢様が工事現場で肉体労働：ストリップまで!?
セレブ界も格差社会だ!!

42兆円踏み倒して
やりますわ
**借金お嬢
クリス**
2

小説/筑摩十幸 挿絵/了藤誠仁



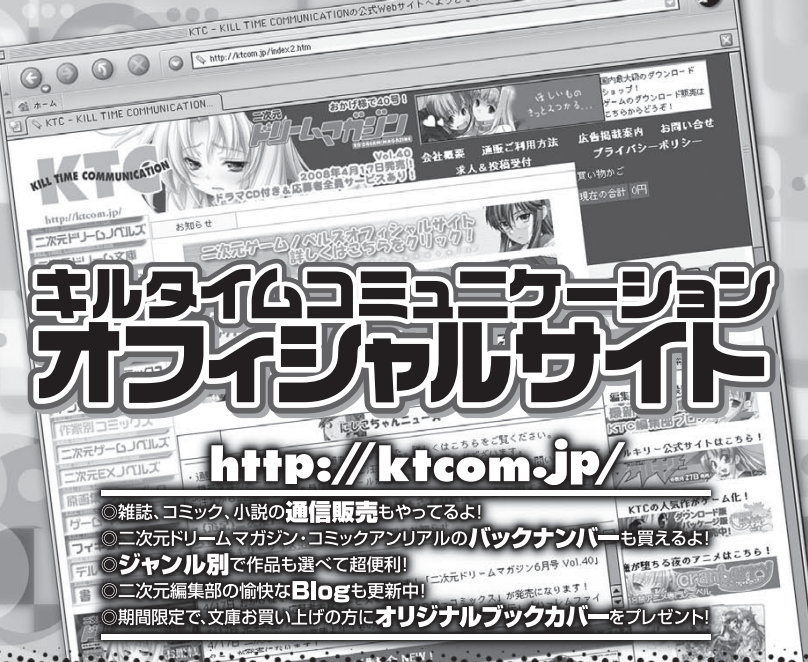
全国書店で
**好評
発売中**

セレブな生活を取り戻すために
魔物にバトルを挑む元・令嬢!

小説/筑摩十幸 挿絵/了藤誠仁

42兆円を踏み倒して
やりますわ
**借金お嬢
クリス**





<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!